

できるだけ盛らず、飾らず、
あの人に聞いたあの人の人生のお話を、
“そのまま”で、
“あの人自身”が再現されているような
そんなものを作りたいと思って、
もがいた末にできたのが、今号です。
“そのまま”はいつだって届かない目標で、
ある人がひとり生きてきた痕跡は、
どれだけ長い文章を書いても、
どれだけたくさんの写真を撮っても、
それはもう何かに移し取った別のものであって、
“そのまま”なわけではないんですが、
本当に小さな、極小の欠片だけでも
形にして残しておくことができれば
それはそれでいいんじゃないかと
最近思ってます。

石川拓也（ときちょうものがたり編集長）

zine 15

「土佐町の人々」

文 鳥山 百合子

和田邦美

田岡三代

川井高廣・規共

「町とは、そこに住む人のこと」と
いう言葉を以前耳にしました。

町に住む人のこと、町に住む人の
人生のこと、私たちはどのくらい
知っているでしょう？

「あなたのことを、教えてください」
とさちょうものがたり編集部から
のこのお願いを、寛大に聞き入れ
てくれた町の方々の中から、今号
では3組のお話をお届けします。





「 persona 1 追憶のビルマ 」

和田邦美

wada kunimi

太平洋戦争中、当時 21 歳だった和田邦美さんは陸軍兵としてビルマへ向かった。ビルマ戦では戦鬪で亡くなる人より、飢えや病気で亡くなる人が多かった。「地獄のビルマ」「最悪の戦場」といわれる所以だ。邦美さんは飢えやマラリアに苦しみ、生きることが何度も諦めかけながら、ビルマの戦場を歩いて、歩いて、生き抜いた。現在、土佐町上野地区で暮らし、御年 103 歳。ビルマの記憶はこれからも消えることはない。



2025 年 10 月 25 日、高知県土佐町に住む和田邦美さんは 103 歳の誕生日を迎えた。夕方、娘さん家族や孫、ひ孫が集まって誕生日会が開かれた。

お寿司などのご馳走が並び「103 歳おめでとう！」というお祝いの言葉が壁に飾られていた。多分ひ孫さんが書いたのだろう。丁寧に書かれたカラフルな文字から、お祝いの気持ちが溢れ出ている。

この日、邦美さんご家族の記念写真を撮らせていただいた。玄関先で撮影することになり、邦美さんは部屋から玄関先へ向かった。靴を履く時、邦美さんは手に持っていた缶ビールを娘さんに預けた。玄関先の壁に取り付けられた手すりを掴まずに片足を上げ、一方の靴を履くために腰をかがめ、マジックテープをしっかりととめた。続けてもう一方の靴も。両靴を履いた後、丸めていた背中をぐいっと上へ伸ばした。そして少しもよろめくことなく、しっかりした足取りで歩き始めた。

今から約 83 年前、太平洋戦争中、邦美さんは陸

軍兵としてビルマへ向かった。激戦地だったビルマは「最悪の戦場」「地獄のビルマ」と呼ばれるほど過酷な戦場だった。

連合国の攻撃から逃げ回り、飢えやマラリアと戦いながら、仲間が次々と死んだ。何度も諦めかけながら、必死に歩き続けた。立ち止まることはすなわち死を意味した。邦美さんは歩いて歩いて、生き抜いた。

太平洋戦争中、ビルマ戦に派遣された日本兵は 30 万人、戦没者は 19 万人。今もビルマには数万の遺骨が眠っているといわれている。

大川村での生活

邦美さんは土佐町の隣、高知県大川村で生まれた。鮎が泳ぐ川で魚を突き、近所の人から「ぼう、ぼう（坊やの意）」と声をかけられてお菓子をもらってかわいがってもらった。

「畑を安く貸してもらって、母らが野菜を作って、ほんで生活しよった。米は全然ないけんね、普通は麦やらキビやら、トウキビ。土佐町の田井



103 歳の誕生日会の日に家族で記念撮影

でお米を作っている人が山道を上がってきて『米はいらんかよ』と売りに来ていた。米がないなって頼むと、チンカラチンカラ、馬が運んできた」大川村には田がほとんどなく、米を食べるのはお祭りや運動会など行事の時だけ。お米はご馳走、貴重なものだった。

邦美さんは小学校を卒業後、郵便局で仕事を始めた。「中学校もあったけど、貧乏じゃったから行く余裕がのうて、だから仕事に入ったんじゃ」

郵便局の配達の仕事は賃金が安かった。近くのお菓子屋でお菓子を買ったら手元にお金は残らず、家計の足しにはならない。弟は吉野川の流れを利用して木を流送る仕事をしており、邦美さんの何倍も賃金がよかった。

ある日、弟が川に落ち込み、いなくなった。皆で探し回ると、川の行き詰まりのような場所で詰まった状態で見つかった。

その時、邦美さんは 16 歳。弟が亡くなった後、弟と同じ仕事を始めた。「人生どうなるかわからんけど、賃金のええ方へいこうと。郵政を辞めて山の仕事に入ったのよ」

山で切った木を吉野川で流送し、下流へ運んだ。「格別しんどいこともない。川の両側は水が流れて、川の真ん中に材木がいっぱいかかちゅう。2 本の材木へ乗っかって、材木のかかちゅうくへ乗り付けて、材木を外して、流して。丸太に乗って、トンビ（*）を持って突き流す。材木が無くなったら、また次の岩へ行かないかんけ、また材木を残しちよいて、それに乗って、かかちゅうとを流送する。そういう仕事をしよった」夏は鮎が上がって来るから、川に材木は流せない。冬の寒い時でないといけない仕事だった。この時、1938（昭和 13）年。その前年から、日中戦争が始まっていた。

*トンビ（トビ）：長い柄の先に鉄製のくちばしのような形の穂先がついている道具

召集令状

仕事の傍ら、毎週土曜日、邦美さんは青年学校へ通った。シベリア帰りの陸軍上等兵だった邦美さんの父親が教官で、青年を集め軍事訓練や軍隊教育を行っていた。「兵隊にいかない男子は日本人じゃない」と厳しく訓練が行われた。

太平洋戦争終了まで、日本では、満 20 歳に達した男性は全員徴兵検査を受けることが義務付けられていた。身長や体重、視力や聴力、病気の有無等が検査され、身長は 155cm 以上、身体が強靱と認められた場合は「甲種合格」。その中から選ばれた兵士は「現役兵」になり、すぐに入営することになっていた。

甲種合格の現役兵に次いで「第一乙種」、続いて「第二乙種」という区分があり、補充兵とされていた。

1942 年（昭和 17）、邦美さんは徴兵検査を受けた。結果は「第二乙」だった。

1943 年（昭和 18）、21 歳の時、召集令状が届いた。徴兵検査で「第二乙」だったため、現役兵よりも早く、召集令状が届くとは思っていなかったのが驚いたという。

召集令状が届いた時、どんな思いだったのか聞いた。

「第二乙とはねられたけん、お国の役に立たん人間だと思われて歯がゆかった。やれやれ、人並みに認められたと思った。軍国主義じゃけんね、兵隊に行かない人間は役に立たんと思われちよったんじゃけ」

当時の日本では「甲種合格以外は恥」という考えが一般的だった。「日本男児たるもの、こうあらねばならない」という圧倒的な圧力があっただろう。その圧は当時の日本人の考え方に多大な影響を及ぼしていたことは想像に難くない。

入営

1943 年（昭和 18）4 月。邦美さんは大川村から



初年兵のとき。中央左から2人目が邦美さん。

バスに乗り、大杉駅（大豊町）へ向かった。汽車に乗って高知市朝倉へ行き、西部三十四部隊第三中隊に入隊。歩兵第百四十四連隊に編入された。現在の高知大学朝倉キャンパスが第百四十四連隊兵営跡地にあたる。

初年兵は大部屋で寝泊まりし、一度入営したら外へ出ることはない。軍事教練の日々が始まった。

「前へー、進め！右むけ右、左むけ左！回れー、右！」

鉄砲を下げ、号令と命令通りに動く。軍隊の規則を仕込まれた。

相手の胸を突く銃剣術訓練も「うんとやった」。各隊から選手を出して、銃槍で突き合う試合を行い、胸をドン！ととともに突いたら勝ちになる。邦美さんも選手になり「人並みよりはまあ、技術にたけちよったのか、選手に選ばれて試合をやらされてたわね」。古兵が「今年の初年兵は銃剣術がうまいけに、もうけた」と喜んでたという。

邦美さんは一枚の写真を見せてくれた。セピア色の写真に軍服を着た若者たちが写っている。

軍服の色は「確か黄色っぽい色やったと思う。帽子の真ん中に赤い線があって」。

皆、軍靴を履いている。

「編上げの両方にある爪に紐を引っ掛けていく靴で。巻き脚絆を巻いてるわね、足へぐるぐるっと巻いて。足首から軍靴の上へ被せて、向こう脛の上まで巻き上げてきて、結んで」

しっかり履いていないと上官に怒られた。

「巻くのが遅かったり周りから遅れたらいかんけね。一所懸命巻いて、くるくるって両方の足を巻き上げていかんやあ。巻き上げた終わりが横の小口が止まるように、そんな技術がいったのよ。必ず尾錠が真正面へくるようにしないといかん」

兵士としての身だしなみはきっちりしていないといけない、と上官は常に厳しかったという。

志願

丸1年ほど訓練を真面目に行えば、陸軍の上等兵まで階級があがる。

そのうち、野戦要員というものができた。野戦

要員は実際に戦地に出る兵隊のことをいう。第一次野戦要員が発表され、同年兵の大半がその中に入った。野戦行きが決まったら演習も勤務もなく、毎日ぶらぶらと遊び、外泊が許可されて家に帰る者もいた。邦美さんは選ばれなかった。取り残されたような気がして、同年兵が遊んでいる姿が羨ましくて仕方なかったそうだ。

ある日、西岡好幸准尉から「お前は真面目じゃきに、下士官候補生になってここにおいて、後から来る兵隊の教育係になれ」という話があった。

邦美さんは「野戦行きはここで毎日遊んで暮らしゆう。こっちは毎日、訓練しなさいと仕込まれる。たまらんけ、野戦へ回してくれ」と話を断り、野戦行きを志願したそうだ。

「おんしは馬鹿じゃ。ここにおったら戦場へ出ることはないんじゃけ、後から入ってきた兵隊を訓練したら、朝倉で安定して生活ができるろう」「わしも皆と同じように野戦に出たい。こんど二次野戦編成がある時はぜひお願いします」と准尉に頼んだ。「お前も馬鹿な男よ。仕方がない、もし俺が野戦行きになったら考えてやるけに、真面目に働け」と諭されたという。

憲兵要員の募集もあった。人事係に「中隊から誰が出さねばならん、どうだ？」と言われたが「人をくくったりするのは嫌」と断った。「お前はあれも嫌、これも嫌というが、何かやらんといかん」と叱られた。

その後、西岡准尉が野戦行きになった。「おい、和田、野戦行きになったらどうするろ？」「行くいく」「じゃあ、俺の当番兵になれ」

当番兵とは准尉のそばに張り付いて、食事等のお世話を担う。それ以来、邦美さんは西岡准尉と行動を共にすることになった。

ちなみに、邦美さんは野戦行きが決まったものの、発表から出発まで時間がなく外泊できなかったそうだ。もちろん遊ぶこともできず。面会に来た両親と少し会っただけで、思っていたのと違う、とがっかりしたそうだ。

歩兵第百四十四聯隊

今回、邦美さんの自宅にうかがって話を聞いた。邦美さんは座っている傍らから、一冊の本を取り出した。茶色の布張りの分厚い本で、背表紙には金色の文字で「歩兵第百四十四聯隊戦記」と書かれている。

ページはうっすら茶色に変色し、何千何万回とページをめくっただろう手垢がついている。邦美さんはページをめくりながら、いびつな黒点がいくつも透けて見えるページで手を止めた。現れたのは「歩兵第百四十四聯隊第三中隊編成表」だった。

見開き 2 ページ。指揮班のもと、第一小隊、第二小隊、第三小隊があり、各小隊は第一分隊、第二分隊、第三分隊に分かれている。指揮班に邦美さんの名前があった。

表に並ぶ氏名の上に黒マジックで点がつけられている。

「この黒い丸がついちゅうのは、みんな亡くなった」

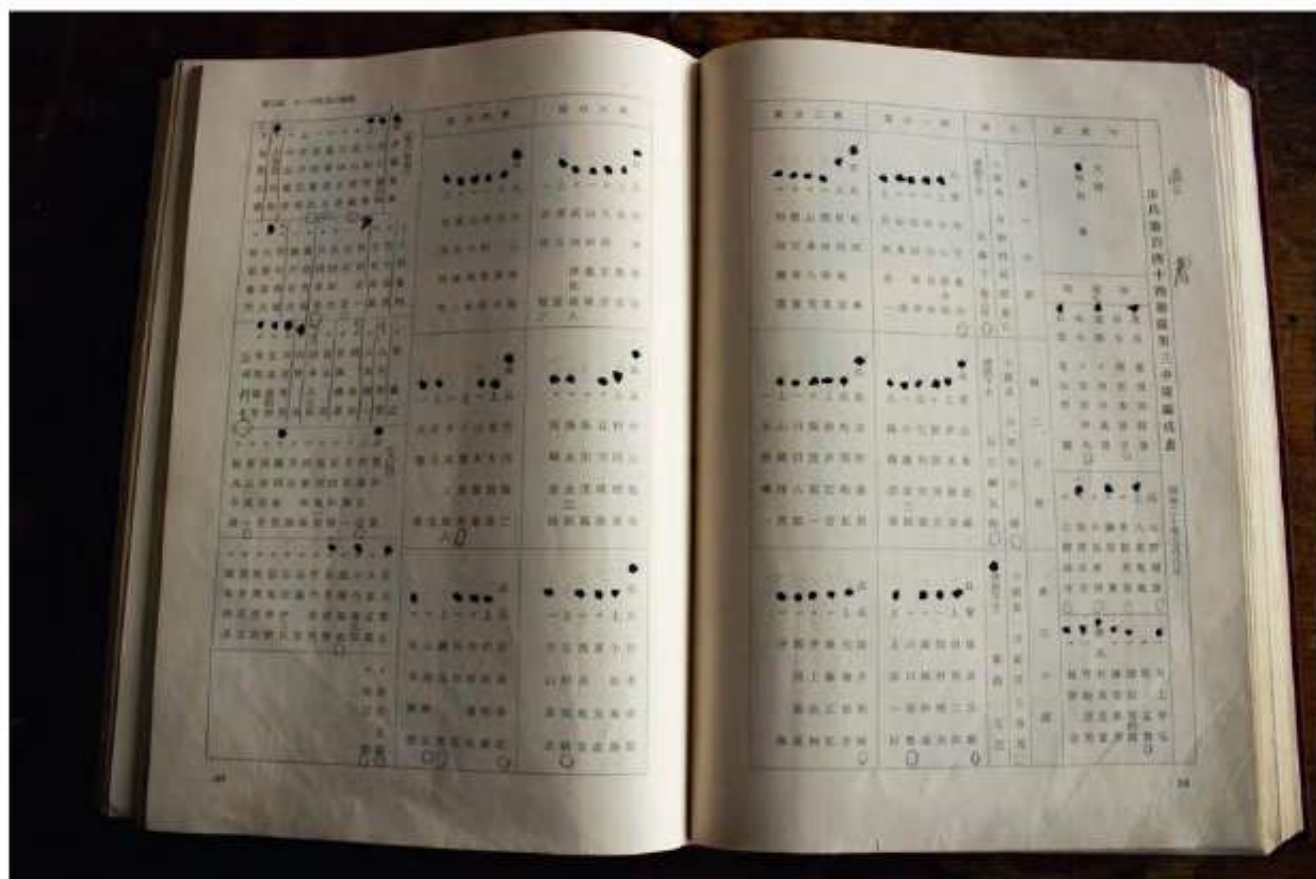
おびただしい数の手描きの黒丸は異様な雰囲気醸し出していた。

「歩兵第百四十四聯隊戦記」は約 700 ページに及び、連隊がビルマ各地をたどった過程や、生還した方の手記が掲載されている。邦美さんの手記もある。

邦美さんが語ってくださった話には「ラングーン」「イラワジデルタ」「アレサンヨー」などいくつもの地名が出てきた。もう 80 年以上前のことであるのに、しっかり記憶されていることに驚いた。

ビルマの記憶はとにかく逃げ回っていたこと。指揮班にいたから生還できたこと。お腹が空いて仕方なかったこと。マラリアを患ったこと。そのことを何度も繰り返し話してくれた。

ここからは邦美さんのお話と手記、「歩兵第百四十四聯隊戦記」や他の資料を照らし合わせながら、邦美さんが歩いたであろうビルマの道のりを



黒い丸が並ぶ「歩兵第百四十四聯隊第三中隊編成表」

進っていきたいと思う。

ビルマへ向かう

1943（昭和18）年9月、邦美さんが所属する連隊は朝倉を出発し、福岡県の門司へ向かった。船団の都合で1週間ほど門司に滞在。9月30日、部隊は日本を発ち、ビルマ（現在のミャンマー）へ向かって出発した。乗船後に空襲や台風に遭い、約1ヶ月後、タイ・バンコクに上陸。12月初旬、タイ国から国境を越え、鉄道でビルマのラングーン（現在のヤンゴン）に入った。

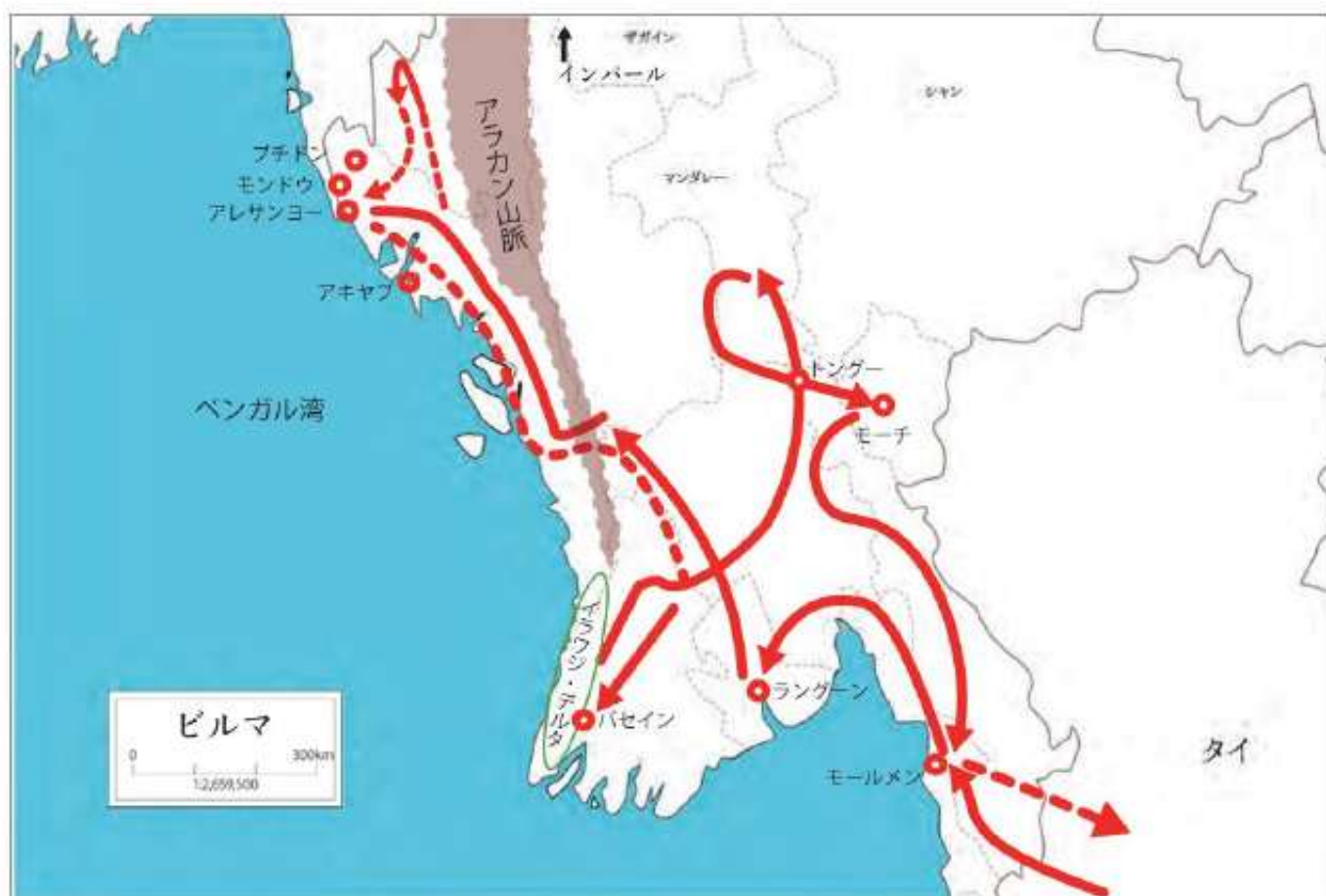
内地を発ってから、邦美さんは西岡准尉の当番として輸送隊の指揮班に入っていた。ラングーンに到着すると、隊は新しく編成され、再び西岡准尉と共に第三中隊へ編入された。部隊はインドとビルマ国境のマユ半島へ向かうことになったが、西岡准尉がマラリアを患ったため、一緒に残り、お世話をした。

アラカン山脈を超えて

1944（昭和19）年の正月は、ラングーンで迎えた。西岡准尉が回復したため、邦美さんは本隊を追いかけた。

ラングーンからベンガル湾に面したマユ半島へ向かう。マユ半島へ向かうには、ビルマとインドの境界を南北に連なるアラカン山脈を超える必要があった。アラカン山脈は世界屈指の豪雨地帯。雨季には月間1,000mm以上の雨が降る。日本の年間降水量が平均1,700mmといわれているので、その雨量の多さが分かるだろう。

ビルマは雨季と乾季の二季に分かれており、雨季は5月から10月、乾季は11月から4月まで。アラカン山脈は2,000m級の山々が連なり、長さ3,000kmの大山脈が続く。他の方の手記には「虎の襲撃を避けるため、空き缶をガラガラ引きずって踏破した」という記述もあった。やっとの思いでアラカン山脈を超え、アレサンヨー付近で「ハ号作戦」下の第三中隊指揮班に入り、警備に



歩兵第百四十四聯隊行動図（参考文献「土佐っば砲隊ビルマを征く」）

あたったという。

「ハ号作戦」とは？

一旦、当時の日本軍の状況を整理したい。

1941（昭和 16）年 12 月 8 日、日本軍はアメリカに宣戦布告し、アメリカ・ハワイの真珠湾を攻撃。太平洋戦争が始まった。この時、日本はイギリスにも宣戦布告をしていた。

1937（昭和 12）年から日本軍は日中戦争を行っていたが、アメリカとイギリスは中国の味方をし、兵器や食糧等を支援。そのため、日本軍はかなりの苦戦を強いられていた。この中国への支援を断ち切るため、この時、アメリカとイギリスに宣戦布告したのだった。

当時、イギリスはビルマを経由し、中国重慶まで続く「援蒋ルート」を使い、鉄道やトラックなどで物資を運び込んでいた。日本軍はこの援蒋ルートを断ち切るため、ビルマに進軍。1942（昭和 17）年 5 月にほぼ全域を占領した。けれども

陸のルートは断ち切っても、イギリス軍は航空機を使い、空のルートから中国へ物資を送り続けた。

日中戦争や太平洋戦争、戦争続きの日本は常に物資不足の状態だった。そのため、石油やゴムなど資源が豊富な東南アジア諸国に目を付けた。当時、アメリカが植民地としてフィリピンを支配、イギリスはマレー半島を、フランスやオランダが他の東南アジア諸国を支配していた。

日本軍はイギリス領だった香港やシンガポール、マレーシアなどに攻め込み、快進撃を続けた。しかし、1942 年のミッドウェー海戦やガダルカナル島での戦いで敗北。転がるように劣勢に陥っていった。その間には中国との戦いも続いている。

この負け続きをなんとか挽回したい。その思いで、日本軍はインド侵攻を決めた。当時、インドはイギリスの植民地となっていた。日本軍はイギリス軍には負けたことがなかったため、イギリス領インドを攻め、勝利して負の雰囲気を

一新したいと考えた。そのため、インドとビルマの国境付近の都市、イギリス領インドの軍事拠点だったインパールを攻めようと考案を始めた。これが、後に史上最悪の作戦と呼ばれる「インパール作戦」だ。

インパール作戦は、食料や武器を補給できないと司令部が分かっていたにも関わらず、1944年3月に実行された。日本軍の牟田口廉也中將による無謀な作戦。そしてその作戦開始を反対できなかった日本軍の組織の闇があった。

結果的にイギリス軍の反攻により完全に敗北、7月に中止された。その後の退却途中でも甚大な犠牲を生んだ。

インパール作戦で命を落とした日本兵は、30,000人以上といわれている。食糧も武器も尽きた兵士たちは、飢餓やマラリアなどで次々に死んだ。手榴弾で自決した兵士も多かった。遺体はそのまま置かれ、日本兵が敗走した山道は遺体が折り重なり白骨化。のちに「白骨街道」と呼ばれることになる。

そのインパール作戦を陽動するために立てられた作戦が、歩兵第百四十四聯隊も関係した「ハ号作戦」だ。1944年2月から5月末まで行われた作戦で、目的は二つ。大きな港町であるアキャブ（現在のシットウェ）を進軍してくるイギリス軍から守るため。そして、マユ半島にイギリス軍を寄せ付け、インパール作戦のおとりとして、陽動することだった。

劣悪な道

野宿しながら山を進み、靴下へ入れて背囊の中にくくりつけていた米を飯盒で炊いて、少しずつ食べた。「飯を炊く時は煙が出るき。敵の飛行機に見つかるき、飯を炊くのには苦労したぜよ」食糧はどんどんなくなっていった。

「米がない時には現地人が粍をかこんじよるがね、現地人の粍を略奪して。飯盒なんかでついて、黒米にして食べた。粍の中へバナナを隠しよるけんね、よう熟れたのがあったらちょっと失敬

してご馳走になったりした」

食糧の補給はほぼ途絶えていたため、現地調達する必要があった。常にお腹が空いて、お腹が空いてたまらなかった。

「ハチクみたいな筍がよう生えちゅうがね。よく採って炊いて食べたがよ。ビルマには高知みたいな竹藪がようあったんじゃ」

マユ半島では、プチドン、モンドウ付近で戦闘が繰り返されていた。

邦美さんの所属する第三中隊は、1944年4月、アレサンヨーとモンドウの間、ゴドサラから東北の内陸に向かって2キロ地点にある「メガネ高地」をめぐり、死闘を繰り返した。一度は制圧したメガネ高地を敵国に占領され、攻撃を再開。敵の戦車や砲撃により、兵士は次々と戦死した。

邦美さんは、中隊長から前方の集落へ侵入した敵への攻撃を命じられた。「めくらめっぽうに撃たれながら」、擲弾筒（手榴弾をより遠くに飛ばす携帯用小型火器）を打ち込んだ。

「戦友はたくさん死んだ。はじめっから負け戦で、ビルマの山の中に逃げ込んで走り回って。あるのは逃げ回った記憶ばかりよね」

邦美さんは何度もそう言っていた。

イラワジ・デルタ駐留

1944年5月末、ハ号作戦は終了し、邦美さんは兵器係の松野賢伍長の助手になった。その後、部隊はビルマを南下し、イラワジ・デルタに駐留して海岸警備にあたることになった。ハ号作戦後の消耗し切った身体。ましてや雨季に、ドロドロにぬかるんだ山々を超えてイラワジ・デルタまでたどり着くことは、相当困難だったと想像する。

邦美さんの手記によると、1944年9月から1945年3月ごろまで駐留。ここでは割と穏やかに時間が過ぎたようだ。イラワジ・デルタ周辺はビルマの穀倉地帯。物資は豊富にあって、体力を少しずつ回復できたという。

駐留の間、邦美さんは中隊長（後の松田務大尉）と共に隊を離れ、周辺の集落や山の測量をしたり、集落に泊まったりした。象の背中に乗ったこともあった。

「遠浅の海で。網を担いで二人で引っ張ってきたら、ええ魚は網から飛び出て、雑魚がブツブツとれて。それをとって生活しよった」

別の方の手記には、海亀の卵を食べたという記述もあった。

この頃の日本の状況はというと、1944年7月、サイパン島の戦いでアメリカに敗戦。東條英機内閣はその責任を取って総辞職している。

1944年11月から、B29爆撃機による本格的な日本本土への空襲が開始。1945（昭和20）年3月10日の東京大空襲では10万人を超える人が亡くなった。日本国内では敗戦の色が濃厚となっていた。

激戦地・モーチ街道

1945年3月下旬、連隊に中部ビルマのトンゲーへ転進の命令が届いた。ビルマ中部のトンゲーの治安維持と戦闘準備のための転進だった。当時、イギリス軍が戦車や航空機で来襲。日本の飛行機が飛んでくることはなかった。武器も食糧も底をつき、ビルマ中部の各地の全戦線はどこも総崩れ状態になっていた。

邦美さんは、転進の際に中隊の梱包宰領（運送荷物の管理）を命ぜられ、大隊の移送隊に加わり、中隊と離れて別行動になった。移送途中に爆撃を受け、兵器や兵服等は全て焼失、書類だけが残った。各隊1名ずつが書類を管理し、それ以外の兵は本隊を追いかけることとなった。邦美さんは本隊を追いかけ、モーチの山中で中隊の指揮班に追いついた。

邦美さんの手記によると、追いついたのは4月末か5月初め頃だという。

トンゲーからモーチをつなぐモーチ街道で、邦美さんがいない間に、多くの兵が失われていた。

邦美さんが戻ったことを、西岡准尉がとても喜んだという。

「モーチ街道が我々の一番の激戦地。敵の戦車がどんどんどんどん攻めてくる。敵が来たら慌てて逃げて、逃げて逃げて逃げ回って。山の中を這って、走って回ったわね。マラリアにやられた人、体が弱ってちやがまった（土佐弁で「だめになる」の意）人。動きよらなかったら、そのまま置いといた。むごいものよ」

邦美さんは絞り出すように言った。

邦美さんが合流した後も、激しい戦いは続いた。邦美さんは、この時の様子を手記に記している。「特に私の心に残るのは5月20日、久保正彦上等兵（室戸市吉良川）が戦死した日のことだ。

その日は、日は暮れても戦闘は激しく続いていた。陣地撤退の命令がでて、指揮班前方にいる中山小隊へ、私は伝令に出された。砲弾の破片が飛び散る中を小隊の位置へ到着すると、闇の中から「おい、だれか」と声がかかった。久保上等兵だった。

取りあえず久保の壕へ入れてもらい、中山少尉のいる位置を聞き、もうこの陣地も撤退だから、お互いにいつまで生きておられるか知れんが精一杯がんばろうぜ、と話していた時、飛んで来た砲弾の破片が久保の頭へ命中した。一声うなったのが最後だった。人間一寸先は闇だと言うが、本当だ。私より元気だった久保が私の目の前で即死だった。

私も伝令の任務も果たさずに死んではまずいと思い、久保に別れを告げ壕を出て、少尉のいる方向へ向かった。中隊へ配属の重機関銃が陣地にやって来た敵戦車に向け銃身を真っ赤にして激しく撃っていた。他に火器がないので、重機がとても頼もしく思われた。」

邦美さんは中山少尉への伝令の役割を果たし、闇の中を引き返して指揮班の陣地へ戻った。中隊当番の中嶋義男上等兵（高岡郡窪川町）が一人で邦美さんの帰りを待っていてくれて、二人で指揮班の移動した方向へ追いかけた。（のちに

中嶋上等兵も生還)

6月中旬頃まで激しい戦いが続いた。やがて一線を交替の部隊に申し送り、ビルマ南部のモールメンへの転進が始まった。

ラングーン陥落

時を少し遡る。上記の久保上等兵が戦死する前、1945年4月末、日本軍司令部はビルマの首都であるラングーンを撤退していた。「援蒋ルート」を断ち切るというビルマ侵攻の目的は果たせず、事実上、日本軍はビルマでの戦いに敗れたのだった。なんと、ビルマ各地に残る兵士はそのままに司令部は逃げ、ラングーンを脱出。タイ国境近くのモールメンへ後退していた。

5月3日、イギリス軍はラングーンを占領し、日本軍のビルマ戦敗北が決定した。

邦美さんが何度も話していたことがあった。

「日本の飛行機はビルマの空に来ることはなかった」と。「哀れなものよ。敵に見つからないように山の中に逃げ回りよったわけよね。ビルマに着いた時からずっと逃げていた。戦うためには行ったんじゃないけど、負け戦でとにかくビルマで逃げ回った。敵と戦う馬力なんてなかったのよね」

終戦までビルマ各地で戦いは続き、飢えやマラリアで多くの兵士が亡くなった。手榴弾で自死する者もいた。ビルマ戦では、戦場で亡くなった人よりも餓死や病気で亡くなった人の方が多いといわれ、それが「地獄のビルマ」と呼ばれる所以でもある。

ビルマ各地に残された日本兵は、司令部がラングーンを脱出していたことを知っていたのだろうか。それを知るのは生き残った人だけ、それも戦後何十年も経ってからだったのではないだろうか。命令を下す司令部はいつも戦場から遠いところにいる。命を落とすのはいつも、地獄の戦場を自らの足で歩かざるをえない人たちだ。

マラリア

1945年6月、邦美さんはマラリアと脚気を患った。栄養失調にもなっていた。

邦美さんは、その時のことをとうとうと話した。「マラリアというのは熱が高いわけよね、42度くらいの熱が出るき、しんどうてしんどうて動けんのじゃけんど。

そうかというて途中でちやがまったら、行方不明になって、落伍したら終わりになるけんね。歩かにな、和田は名誉の戦死をしたということになるけ。死にとうはないけに。部隊の動く所へはどうやってでもついていかないかん。ついていくのに苦労したわね」

「足が脚気になって、足がむくんで膨れてしんどいけに、それこそ部隊について歩くのがうるそうてしんどうて。途中でちやがまった兵隊は「おい、和田。休んで行こうぜや」言うて。わしは「まあ、俺はもうちっといくけに」と。途中で座り込んだ兵隊は、結局帰ってくることはなかったけんね」

「あくる日も熱が出てるんじゃきに、人より先に出て動き始めるけん、途中でしんどうて部隊が先に追い越していくのを後からトコトコとついて歩いて。どうにか部隊が動く先へ、後ろからついて歩いた。それで生きて戻れたのよ。部隊はどこ行くやらわからん。ついて行かないといかん。とにかく生きて戻るためには、動かになダメだったがね」

その間もイギリス軍の航空機が毎日飛んできて、爆撃と機銃掃射が続いた。兵士は次々と戦死、行き倒れていく。7月初旬、邦美さんの体調は少し良くなってはいたが、指揮班よりかなり遅れて歩いていた。それが分れ道だった。敵機の爆弾が指揮班を直撃。松田務大尉、西岡准尉、松野賢伍長が即死。大野増恵兵長も負傷した。皆、これまで共に生き抜いてきた上官たちだった。力が抜けた。もう自分も死ぬんだと何度も諦めた。どうせ自分もビルマの土になる。しんどいけ、どうでもいいわ。もう歩けない、もう歩きたく

ない。

そんな時、声が聞こえた。

「おんしゃあ、もっと気合い入れて歩かな、日本へ帰れんぞ！」

負傷した大野兵長だった。

「負傷しているのに気合いを入れてくれた。それもそうじゃ、もうちょっとがんばろうかと思うて、ついて歩いた。くそー、負けたらいかん！と思うてね。朝、一人先に出て、行きよる途中で追い越されても、後から歩いて。部隊がおるくまではついて歩かにや。とにかく歩け！と思って歩いた。よう、まあ、生きて戻れたものよと思う。よう頑張ったもんじゃと思うよ」

なぜ頑張れたのか、邦美さんに聞いた。

「まあ、それは、なんじやろうねえ。一步一步、歌じゃないけど『三步進んで二歩下がる』じゃなしに、一步でも動いて、歩いていかないかんかった」

大野兵長の気合のおかげで頑張れた。邦美さんはそう言っていた。

「日本の兵隊さん、出てきなさい」

その後、部隊は歩いて海岸線まで下がり、海岸近くで魚を取ったりしていた。ある時、頭上を飛ぶ飛行機から日本語が聞こえてきた。

「日本の兵隊さん出てきなさい。戦争は終わりました」

海岸ぶちの山の中に隠れていた兵隊が、皆出てきた。

「日本は神国なのに負けるろうか？おかしいなという考えはあったけど、そういうんじゃけに、本当じやろうねえと思って出ていった」

モチ街道を離れモールメンへ向かう間の様子を、同じ第三中隊に所属していた中山操さんが記していた。

「折節、雨季の真っ最中だった。来る日も来る日もしのつく雨が山を崩し、道なき道を川にし、よるばい歩く敗残の列の行手に立ちほだかった。

それに、飢えとマラリアと赤痢が襲いかかり、私たちを次第に絶望の淵へと追いこんで行った。そのうちに、靴も足も腐り始めた。水に浸かって、乾かす暇がないのだ。靴はぼろぼろになり、足は腫れ上がった。腫れ上がった部分が裂け、ざくろのように口をあけた。

落伍者が相次いだ。それを收容しに行った兵までが隊列に遅れて、自決の坂道をころげ落ちた。落後することは、死ぬことであつたのだ。

そうして聯隊は、モールメンにたどりついた。たかだか縦深百キロそこらの山を踏破するのに五十余日もかかっていた。その間に、何十何人の仲間を失ったか。

8月18日だった。聯隊は整列して、先着の聯隊長に各隊が人員報告をした。そのとき、私は震えた。青白んだ聯隊長の顔がゆがんで見えた。そうして、やっとの思いで、「第三中隊、長以下13名」と声をあげながら、涙がぼうだとして頬をつたったのを覚えている。

一個中隊150人近かった仲間が、半年のうちに、たったの13人になったのだ。戦争は3日前に終わっていた」

邦美さんに気合を入れてくれた大野さんはどうなったのか、聞いた。

「生きて、一緒に帰ってきた」

それを聞き、そのことは心底よかったと思えた。その後、仏領インドシナへ移動した。仏領インドシナは現在のベトナム、ラオス、カンボジアの3国にあたる東南アジアの地域のことをいう。当時はフランスが植民地支配をしていた。

「歩兵第四百四十四聯隊戦記」によると、連隊「今のベトナム東南海岸ロンハイにて昭和21年の正月を迎えた」とある。

「フランスの部隊が管理しよったけんね、フランスの偉い手が生活する遊び場みたいのところへ抑留されて、生活を送りよった」

土を耕してさつま芋を育てたり、井戸を掘ったり、網で魚を捕まえたりしていたという。

帰還

1946（昭和 21）年 5 月上旬、帰還命令が出た。船に乗り、日本へ帰国。広島の大竹へ到着した。「大竹で金をもらって。兵隊の給料、確か 3 千円じゃった。汽車はただで乗れて、大杉まで帰ってきた」

駅でみかんを買ったら、思っていたよりもずっと高い金額で「こんなに高いんじゃ、うっかりお金を使えんなあ」と思ったそう。大杉駅からバスで土佐町へ。以前、仕事で宿泊した旅館に泊まった。「旅館で真っ白いお餅をつくっちゃった。おかみさんが分けてくれるかなあと思ったけど、分けてくれなかった。取って食うわけにもいかんし」

旅館から大川村の家まで「とぼとぼと」歩いて帰った。現在、大川村と土佐町をつなぐ上吉野川橋はこの時はまだない。船で川を渡り、歩いて家まで戻った。「わしが戻ったということを土佐町田井の局から大川の局のもんが、家に知らせてくれちゃった」

やっとの思いで家につくと、家族が待っていた。「生きて戻ったか！」家族にとっては邦美さんがビルマにいるのかいないのか分からない状態だった。皆が喜んで泣いて「ワイワイ騒いだことじゃった」。しばらくしたら、同じ連隊の衛生兵だった戦友が村に戻ってきた。「よう生きて戻ってきたもんじゃなあ」と互いに肩をたたき合った。「戦友はほとんどビルマで死んでしもうちゅうのに。みんなだんだん死んでいった。指揮班で准尉のそばにいたから生きて戻れた。そうでなかったら、ビルマで死んじゃった」

戦後、邦美さんは山の仕事を始めた。大きな道路ができ、仕事がなくなって、車に乗ることを覚えなかつた。高知市一宮の自動車学校へ通った。その後は、土佐町のスーパーの運送の仕事をした。結婚して 4 人の娘が生まれた。早明浦ダムの建設が決まり、大川村の家を立ち退くこ

とになって土佐町に土地を購入した。米を作り、90 歳ごろまで田植えから稲刈りまで行っていた。現在、平日はデイサービスに出かけ、帰宅したら畑の草引きをする。先日は畑でマダニにかまれてしまったそう。幸い何事もなく、娘さんに「もう畑に行ったら行かんよ」と言われても畑に行く。

1982（昭和 57）年、ビルマ戦で亡くなった人たちを祀るため、復員した人たちと高知市吸江にビルマの仏塔・高知平和パコダを建てた。毎年慰霊祭を行っていたが「みなが歳をとって毎年行けなくなってしまった」という。

「歩兵第百四十四聯隊戦記」の最後に、ビルマ戦で亡くなった方々の氏名と本籍地、戦没年月日と戦没場所が掲載されている。高知県全市町村から出征しており、生きて再び故郷の土を踏めなかった方たちは 3 千人を超える。高知平和パコダでの慰霊祭は、今も遺族の方たちによって続けられている。

戦争は殺し合い

「ビルマ戦の目的は、一体何だったのでしょうかね…」私がひとり言のようにつぶやくのを聞いて、邦美さんは「目的は…、ラングーンに入って……」。そう呟いて、遠く宙の一点を見つめ、沈黙してしまった。30 秒ほど経った頃だったと思う。「何の目的もなかったろうねえ、もう。言うたら逃げまわりゆうぐらいじゃけ…」

話の最後に、邦美さんは一言ひと言を絞り出すように言った。

「戦争は殺し合いじゃ。人を殺すということも、殺されることもええことじゃない。嫌じゃねえ」とても抱えきれないような、重たい言葉だった。今回お話をうかがう時、次女の友美さんが邦美さんに付き添ってくださった。庭に出て、邦美さんと長女の浪子さん、友美さんと三人で撮影した。

娘さんたちは邦美さんに寄り添い、三人とも少し恥ずかしそうに笑って立っていた。もし邦美



自宅の庭で。左から、長女浪子さん、邦美さん、次女友美さん

さんがビルマで歩くことを諦めていたら、子どもたちは生まれてくることはなかった。私も三人が庭に立っている風景を見ることはなかったのだと思うと、一人の人間が生きることを意味を考えずにいられなかった。

戦争を思い出すのは辛いことで、話した日は夢

を見たり、しんどくなったりするのだと、浪子さんから聞いた。

それでも邦美さんは身体に刻まれた記憶をたどりながら、懸命に自らの言葉にして伝えてくださった。

そのことを心より、感謝します。